

館林キリスト教会 デボーションノート（2025年）

11月1日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 10：11～25
「確信に満たされて」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU102.mp3>

祭司を始めとする人々は、年ごとに、いけにえをささげるたびに罪の記憶がよみがえってきました。雄牛ややぎの血は罪を除くことができないからです。しかし、キリストは私たちの罪のために十字架についてくださいました。キリストを信じる人は、罪ゆるされ、永遠にきよめられたのです。ですから「彼らの罪と彼らの不法とを、思い出すことはしない」と言われます。そして、キリストを信じた人は、キリストという生きた道を通して聖所にはいることができます。すなわち、神様にいつでも祈り、助けと祝福を受けることができるのです。ですから私たちは、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ神様に祈ることが許されています。私たちは、愛と善行に励み、互いに励まし合い、集会を守り続けましょう。

11月2日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 10：26～31
「厳しい警告」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU103.mp3>

著者は、もし人が真理の知識から離れようとするれば、唯一の救いの道を放棄することになることを告げています。モーセの律法のもとでも、もし人が神を否定し、契約に反すれば2、3の人の証言によって石で撃ち殺されねばなりませんでした。そこにはもうその罪の赦しはありえませんでした。まして、神がキリストの死によって新しい契約の民とされた者が、この新しい契約に反して、もとの生活に戻るようであれば、その者に対する神の刑罰は、どれほど厳しいものになることでしょうか。キリストはただ一度だけ、人間の負うべき刑罰を一身に受けて死なれたのであって、繰り返しはあり得ないのです。そこでヘブル人への手紙の著者が旧約の律法と預言者の言葉で、鋭く警告を発しているのです。

11月3日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 10：32～39
「信仰の勇者たちの証」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU104.mp3>

著者は、信仰者が確信に満たされつつ歩むために、「背教者に対する厳しい警告」（26～31節）を述べた後に、迫害のさなかにも信仰の勇者たちが数々の恵みを証したことを述べています。ここでは、初代クリスチャンたちの「聖徒の交わり」の具体的な内容を知ることができます。その第一は「逆境と不遇の中にある人々と苦労を共にしながら激しい戦いに耐えた」（33節）ということです。第二に、「獄に入れられた人々を思いやった」（34節）ということです。第三は、彼らが「財産を奪われても喜んで忍んだ」（34節）ということです。どうしてそのよう

なことが出来たかと言えば、もっとまさった永遠の宝を持っていることを知っていたからです。

1 1月4日 今日に通読箇所 ヨブ記 1章1～12

「天上、霊界の序幕」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE011.mp3>

ヨブはほとんど申し分ない聖徒で、その生涯の証はいつも神の栄光をあらわし、俗に言えば神様のご自慢だった。これに対して、サタンは、ヨブの信仰も一種の取り引きで、祝福のために神を信じているのだ。祝福を失えばすぐ神を離れるだろうと言う。この訴えに対する神の勝利のためには、否ヨブの証が全うされるためには気の毒だが、理由なく祝福を失った場合の、ヨブの態度を見る以外にないのだ。

1 1月5日 今日に通読箇所 ヨブ記 1章13～22

「事故と破産」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE012.mp3>

突然にヨブ一家を襲った災害は悲惨だ。今日の言葉で言えば、会社は破産して無一物となり、災害と事故で子供らに死なれ、悄然とヨブ夫妻が取り残されたのである。ここにおいてヨブは、衣を裂き、頭を剃り、地に伏したが、その悲しみの間にも、絶えて一言も、神様に対する不満、不信仰の言葉は出なかった。その悲痛な言葉の中には、かえって昨日までの豊かな神の祝福に対する感謝にみちている。

1 1月6日 今日に通読箇所 ヨブ記 2章1～10

「ヨブの重い皮膚病」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE021.mp3>

サタンはそれでも黙らない。誠に彼はその名の如く、神に敵視し、批評し、試みる者である。次にヨブは重い皮膚病になった。今度は祝福を失っただけではなく、身に災害を受けたのだ。しかしヨブの神に対する信仰と愛と従順の心は堅固だった。奥さんの方はさすがに参ってしまった。しかし彼女の言葉のように不信仰に陥ったら？結局救いも希望も失なわれ、その言葉のように夫婦心中が関の山だ。

1 1月7日 今日に通読箇所 ヨブ記 2章11～3章10

「三人の友」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE022.mp3>

「ソロモンとヨブは、人間の悲惨を最もよく知り、語った人である。一人は最も幸福な人で、快樂の空虚を、一人は最も不幸な人で、災害の实在を知った」パスカル。ヨブの三人の友は、うわさを聞いて尋ねて来たが、あまりの有様にただ泣くだけだった。ヨブは、昔は祝福された自分の誕生を、今は悲しみの心で呪う。救いの希望がなければ、人の誕生も決して手ばなしのお祝いではない。

11月8日 今日の通読箇所 ヨブ記 3章11～26

「自殺願望」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE031.mp3>

「私なんか生きて来ないほうが良かった。今はただもう早く死にたい」一生の間に、そういう気持ちを一回も経験しない人がいるだろうか。今ヨブはその気持ちを告白している。しかし、ヨブの言葉には不思議な節度があって、生れた日を呪っても神を呪うことをせず、死を望んでも自殺をほのめかす言葉はない。「人を殺す」のは、ほかの人でも自分でも、同じく罪であると知っているからだ。

11月9日 今日の通読箇所 ヨブ記 4章1～21

「神秘家」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE041.mp3>

友人のひとりエリパズは、幾分か神秘的な傾向を持った人らしい。彼はヨブに忠告を試みる。つまり「神は正しい方だから正しい者を祝福する。罪を犯す者には、反省を与えるため、あるいは裁きのために災害を与える。そして神の前には、決して真に正しい人はあり得ない」言いかえると、ヨブの受けた災害はヨブの罪の結果だ。罪を反省し取りのぞけば、災害もまたのぞかれ祝福も戻るだろうと。

11月10日 今日の通読箇所 ヨブ記 5章1～27

「大いなる神」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE051.mp3>

エリパズの同趣旨の話は続く。これは「神を信じ神に祈り、神に従う者に対する神の祝福がどんなに行き届いたものか、また神を崇めず、従わず、罪を犯す者は、どんなに賢く周到であっても、権勢や富があっても、神の裁きと呪いを逃れることができない」という真理を歌った、荘重な詩として味わうことができる。しかし、この場合のヨブにとって、この言葉は慰めになったろうか？

11月11日 今日の通読箇所 ヨブ記 6章1～13

「全能者の矢」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE061.mp3>

ヨブは決して自分の罪の自覚に欠けている人ではない。子供たちの誕生日ごとに、罪の許しを求めてはん祭を献げていたことは、1章にも記してあった。しかし、ヨブがほかの人にくらべて、特別に罪が多いとは考えられない。それなのに神から受けている災害は特別にひどいのだ。これがヨブの罪に正比例するとはとても考えられない。それを言おうとするヨブの言論は、悲痛にして荘重な詩となる。

11月12日 今日の通読箇所 ヨブ記 6章14～30

「水のない川」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE062.mp3>

ヨブは、理屈に合っているようで慰めにならない友の言葉に失望する。この地方にはワデイという谷があって、時には水が流れ、時には氷が張る。しかしいつかその水はかかれてしまう。そしてこの水をあてにして来た隊商たちは失望させられるのみか、砂漠で死んでしまうことさえある。そのようにエリパズの言葉はどこかすれていて、なぜか慰めにも光にもならない。ヨブはそう訴えるのだ。

11月13日 今日に通読箇所 ヨブ記 7章1～10

「苦悶の夜」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE071.mp3>

どんなにひどい労働者も夕方日当をもらう楽しみがあり、奴隷でも夕方からは休める。しかしヨブは、夜になって月が出て、まるで日中の炎熱が続くように、休むことが出来ない。苦痛と苦悶のために眠れないからだ。彼の生はただ呼吸、しかもため息だけの生活のようだ。ヨブは死によってこの苦難に終止符が打たれることを望む。ヨブにはまだこの苦難の本当の意味目的が示されていないのだ。

11月14日 今日に通読箇所 ヨブ記 7章11～21

「むしろ死を望む」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE072.mp3>

神様が夜も昼もヨブを見つめ、深くヨブにかかわっておられることが、疲れ果てたヨブにはかえってわずらわしく、むしろ恐ろしいように感じられる。放っておいてくれれば私は死ねるのに。それがヨブの叫びだ。しかし、試みのすぎ去った時にはヨブも言うだろう。「私は常にあなたと共にあり、あなたは私の右の手を保たれる。あなたはさとしをもって私を導き、後ろに私をうけて栄光にあずからせる」

11月15日 今日に通読箇所 ヨブ記 8章

「ビルダデの発言」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE081.mp3>

ビルダデの言葉も大体エリパズの論旨と似ていて、ヨブの苦難を、ヨブの知らない、その子供たちの罪に対する神の裁きだと言って、ヨブに謙遜反省を勧告する。その言葉に対してもヨブは降参しない。しかし今ビルダデの言葉を、「神が正しい者を祝福し悪しき者を罰する」という原則的真理を示す、独立した文章として読めば、すばらしい詩だ。こういう読み方もヨブ記のひとつの味読なのだ。

11月16日 今日に通読箇所 ヨブ記 9章1～24

「神の公平は？」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE091.mp3>

ヨブは言う「神は全能であり、全く自由なお方だ。誰も神に対して議論することも、抵抗することもできない。神が人の罪を捜索し、その罪を罰するとすれば、誰がその裁きの前に立ち得よう。しかしもしビルダデの論旨をそのまま、押しつけてゆけば、神様は結局、不公平な、気まぐれな神になってしまう。ほかの人とくらべて見た場合、ヨブの苦難がヨブの罪に正比例しているとは思えない。これにはきっと何か別のわけがあるのだ」と。確かにそうだった。

11月17日 今日通読箇所 ヨブ記 9章25～35
「仲保者」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE092.mp3>

「苦難そのものよりも、苦難の理由、意味のわからないのが苦しい」と言われる。ヨブの苦難について、ヨブにかかわって弁護し、神にむかってその理由を質問し、そしてその結果をヨブに説明してくれる者はいないか。ヨブはそう言い、いわゆる「仲保者」を求める。新約には「神は唯一であり仲保者も一人。すなわちキリストである」とあり、我々が神の奥義であり、かつ仲保者であるキリストを持つことはすばらしい。

11月18日 今日通読箇所 ヨブ記 10章
「土の器」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE101.mp3>

「一寸先きは闇」と言うが、人間が生れた時に、彼にどんな人生が待っているか、誰にもわからない。ヨブは自分が神のみ手によって作られた、すばらしい「神の作品」であると感じている。しかし今のヨブの心境では、造り主なる神は、ヨブの罪を追求し、徹底的にそれを問題にしておられるように見える。それに耐える人間がいるはずがない。早くこの苦役から解放されたいと。これはかえって友人たちの言論から追い込まれた心境といえる。

11月19日 今日通読箇所 ヨブ記 11章
「ゾパルの言論」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE111.mp3>

今度はゾパルの言葉だ。しかし彼も、前の二人の友人の趣旨をくり返すに過ぎず、「ヨブは自分の義を主張して悔改めず、神に対して突張っている」と言う。ヨブの言葉を断片的にとらえれば、そうとれなくもない発言もあるが、ヨブの言わんとする趣旨はそれと違う。ヨブの友人たちは案外事実を見て判断するより、自分の教理的な主観や先入主の色眼鏡が強い。それ故話が噛み合わない。

11月20日 今日通読箇所 ヨブ記 12章
「手に神を携える」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE121.mp3>

「勝てば官軍」という言葉があるが、昔神の祝福を受けていたころは人に尊敬

されたヨブであるのに、不遇な立場になると、今度は自分の罪のため祝福を失い、神の裁きを招いたとあざけられ、頑固で悔改めないと非難される。ヨブの友人らはまるで「自分の手に神を携えて」いるように、簡単に、神の正義、裁きを代表したつもりでいる。しかし、とヨブは言う「神様の本当のみ心がわからずに私は苦しんでいるが、君たちだって神様を全部わかっているわけではない」と。

1 1月21日 今日の通読箇所 ヨブ記 13章13～28

「これこそ私の救い」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUI31.mp3>

「この調子では、結局私の運命は尽きて、このままの悲惨な状態で私は死ぬ…神に殺される…かも知れない。しかし私は、何か深い神のみ心と摂理があることを信じて、最後まで神の前に信仰の道を守ってゆく。神様のお取りあつかいも、友達の批評も、納得ゆかないが、しかし自分は信仰を守ってゆく」とヨブは言う。「これのみが私の救いだ」と。

1 1月22日 今日の通読箇所 ヨブ記 14章1～17

「花のいのち」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUI41.mp3>

「花のいのちは短くて、悲しきことのみ多かりき」とは、林芙美子の有名な言葉だ。それもあるいはこの章あたりから出ているかも知れない。しかも人のいのちは短いだけでなく、罪と呪いにみちている。「主が私の罪を見のがされるように。罪を袋に入れて、壁の中に塗りこめて下さるように」ヨブは自分の死を思うとき、そういう祈りをささげるのだ。

1 1月23日 今日の通読箇所 ヨブ記 15章1～16

「空論」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUI51.mp3>

ヨブのような気の毒な人に対して、慰めのためお見舞いに来た友人たちなのだが、議論が激してくると、まるでヨブをやっつけに来たような調子になる。エリパズはヨブに向かって「お前はしゃべりすぎる。役にたたない議論は風のように」などと言っている。ところが私が読むと、どっちの言葉が風のようなか、ご本人にわかっちゃいないので困る。

1 1月24日 今日の通読箇所 ヨブ記 15章17～35

「悪しき人」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUI52.mp3>

ヨブ記の一つの読み方は、ある部分を独立した一つの詩として見ることだ。エリパズの言論のこの部分は、悪しき人とその生涯を、みごとに描写している。27、28には、顔も腹も脂肪でぶくぶくになった人が出てくる。罪の成功で、食いすぎと安逸に暮した結果だ。しかし彼は、神の祝福を失った廃虚に住んでい

るようなもので、決して安全ではないのだ。

1 1月25日 今日通読箇所 ヨブ記 16章
「神に向かって涙をそそぐ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBU161.mp3>

世の中にこれほどの悲痛な名文があるだろうか。一体苦難の中にある人に向けて、幸福な立場の人が3節にあるように「激して語る」ことがあって良いものだろうか。ヨブも今は自分の言葉も人の言葉も、神様のみ心もわからない。ただ「あまりひどい」と言うだけだ。しかしそれでも信仰によって「高いところ」を見上げ「神に向かって涙をそそぐ」のだ。

1 1月26日 今日通読箇所 ヘブル人への手紙 11章1～7
「信仰とは」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU111.mp3>

11章には「信仰とは」という書き出しで、信仰について、及び、信仰に生きた旧約聖書の人々について記されています。「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」(1節)とあり、4節以降に人々の歩みが記されています。これらの人々について思い巡らすことは、大切に有益です。カインとアベルはアダムの息子たちです。弟のアベルは「信仰によって」供え物を捧げ、神様に受け入れられ義とされました。エノクは「信仰によって」神様に喜ばれる歩みを全うし、死を見ないようにして天に移されました。ノアは御告げを受け「信仰によって」箱舟を造りました。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」(6節)。彼らは信仰のゆえに神様に喜ばれ、今もその信仰によって語り続けています。

1 1月27日 今日通読箇所 ヘブル人への手紙 11章8～16
「地上では旅人」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU112.mp3>

創世記12章には「時に主はアブラム(アブラハム)に言われた、『あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう』」とあります。彼はおことばに従い、行く先を知らないで出て行きました。約束の地で、彼は他国にいるような天幕生活をしました。やがて息子イサクが与えられ、お約束のように「大いなる国民」として、天の星のように増え広がりました。アブラハムたちは、約束のものを望み見て喜び地上では旅人、寄留者と告白していました。アブラハムはふるさとウルに帰ることもできましたが、彼が望み見ていたのは、神様が用意してくださったもっと良い天のふるさとでした。

1 1月28日 今日通読箇所 ヘブル人への手紙 11章17～22
「信仰による祝福」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU113.mp3>

ここにはアブラハムの試練とイサク、ヤコブ、ヨセフという信仰の父祖たちのことが記されています。アブラハムは忍耐の末にイサクを与えられ、彼を通して子孫に祝福が及ぶ約束を受けていました。しかし神は、そのイサクを献げるように命じました。アブラハムは、神の約束と神の命令の矛盾に苦しみました。しかし彼は信仰によって「神が死人の中から人をよみがえらせる力がある」（19節）と信じ、神の命令に従ったのです。三人の父祖たちは、息子たちを祝福し語りました。それは民が、約束の地に入り、大いなる国民となるという神の約束が必ず成就するというものでした。彼らは、この約束をしっかりと受け継ぎ、子孫に引き継いでいくことを自覚していたので、決して現状に絶望することなく、希望を抱きつつ死に臨んだのです。

11月29日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 11章23～32
「モーセ誕生の時」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU114.mp3>

当時、イスラエルの人々はエジプトで奴隷生活を余儀なくされていました。過酷な使役にもかかわらず、数が増し脅威を覚えたエジプト王は、イスラエル人に男の子が生まれたら殺せと命令し、それがうまくゆかないと今度は、ナイル川に捨てろと命じました。モーセはこの最悪と思われる時期に生まれたのです。両親アムラムとヨケベデは「信仰によって」三カ月の間家に隠しました。その後ナイルの茂みに置かれた幼子はエジプト王女に見出されました。モーセは幼児期に乳母としての実母に養育され信仰を育まれ、やがて王子として最高の教育を受けました。後にこれらが役立つこととなります。不思議な摂理です。

11月30日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 11章32～40
「信仰の勇者たち」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU115.mp3>

信仰によって生きた人々について細かく語るなら時間も紙面も足りません。名前は明記されていませんが多くの人が信仰を全うしました。「彼らは信仰によって」という内容はわかりやすいものもあります。神様の偉大な御力によりダニエルは「ししの口をふさぎ」シャデラクたちは「火の勢いを消し」、ギデオンを始めとする「弱いものは強くされ」、エリヤやエリシャによって息子たちをよみがえらされた母親たち。ほかの者は、更にまさったいのちのために信仰を全うし、迫害の時代を生きた人々の様子が記されています。これらの信仰の勇者たちもまた、天のふるさと、天の都を望み見つつ「信仰によって」歩みを全うしました。